Angle
―アングル―

温泉と地域の関わり
～温泉を通した集いの場～

千葉商科大学
サービス創造学部
准教授
内田　彩

はじめに

日本は3000ヵ所を超える温泉地が全国各地に存在しており世界有数の温泉大国といえます。奈良時代に島根県玉造温泉が「男も女も老人も子どもも、ある時は道路に行列を作り、ある時は海中を浜辺に沿って歩いてきて、毎日毎日集まるので市が立つほどである」（『風土記』）と書かれたように温泉は人々が集う場でした。そして現在も温泉は多くの人々をひきつける魅力をもつ場であり、温泉を核とした地域づくりが進められています。ここでは温泉と地域の歴史をひもとくと共に、温泉地の活性化を目指した取り組みについて考えてみます。

温泉地とはなにか

温泉地に行くと宿に入り館内の大浴場でのんびりと手足を伸ばしてほっと一息つくのが一般的ですが、こうした形態は近代になり広がったものです。江戸時代には宿に内湯があることは珍しく、宿泊者は共同湯に入浴に行きました。地面から湧きいでる湯はまさに神から与えられた地域の宝であり、共同湯は温泉地のシンボルでした。温泉地は中心的な共同湯（源泉）や広小路を核として、それを囲む湯宿と商店が賑わいを作り出していました。そしてこの集落部を取り囲むように高台に寺社、そして自然との豊かな接触活動を図る共生域がありました。これらの温泉街を川、山など自然が包み込み、温泉街としてもまとまりと独自の魅力ある空間を形成していたといわれています。いまでも古くからの温泉地にはこうした空間の名残があります。

そしてもう一つ大事な温泉地の特徴は「交流」でした。古代から温泉地は病気療養をする「湯治場」であり、各地から人々が集い同じ空間で長期にわたり滞在しました。湯治客は主に自炊をしながら共同湯に通い、入浴の合間に温泉寺社に参詣し、体調に応じて商店、名所、自然散策に出かけて地域の恵みを受けながら3週間前後の日々を過ごしていました。この中心にあったのが湯治客同士、湯治客と地域との交流でした（図1）。湯治場の交流は老若男女の誰にでも行えるとともに、共通の趣味や話題をもつことでさらに親交を深め滞在生活を豊かに彩りました。今日でも山形県肘折温泉は「旅館はお部屋、道路が廊下、お店が売店」を目指していますが、まさに温泉地は温泉を中心として地域自体が一つの宿のような役割を果しており、そこで多様な交流が育まれてきました。

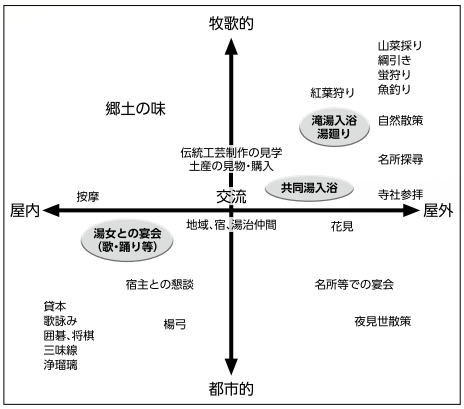

図1　江戸時代の温泉地における保養・観光行動
（出典 内田彩（2014）「湯治文化を生かした温泉地づくり」『観光文化』公財日本交通公社）

温泉地の変容

歴史的に振り返れば温泉地は湯治を目

的とした長期滞在を基本とする療養型から始まり、次第に療養機能もあるが観光機能が強まった中間型、そして現代では療養機能の消滅した短期滞在の観光型と発展しました。特に戦後のマスツーリズムにおいて温泉地は、男性の団体旅行を中心とした慰安の目的地となり、交通の利便性のよい大都市周辺の温泉地は歓楽化し、「温泉を中心としたネオン温泉街への一泊旅行」といわれました。こうした中、厚生省は1954年に国民が広く安心して休養・保養できる温泉地として国民保養温泉地を制定し、1981年には国民保健温泉地を制定するなど健康増進としての温泉地の役割を促進してきました。しかし、マスツーリズムが進む中、従来の収容人数を超える観光客が温泉地に訪れるようになりました。宿泊施設は大型化するために広い敷地と大型バスが通行可能な道路を求めて旧来の温泉街から移転していき、ヒューマンスケールを基本として成り立っていた温泉地の空間構造を大きく変容させました。さらに各施設が施設内に土産店、飲食店、遊戯施設を設置することで、宿泊客を施設内に囲い込んでいきます。この囲い込み戦略は温泉地の個性を失わせるだけではなく、温泉街から賑わいを奪い、地域を疲弊させてしまいました。

湯治場の朝市　（山形県肘折温泉）

温泉地の変容は、空間的な拡大と景観の破壊という目に見える変化と、地域が保有していた温泉地の文化・歴史に対するアイデンティティの喪失という目に見えない変化を招いていきました。加えて1980年代後半のふるさと創生資金による温泉探しブーム等により温泉地以外での温泉開発が増加しました。従来の温泉地は温泉の湧く場所に存在していましたが、この時代から人の集まる場所に温泉を掘削する事例が増加し温泉資源の固有性が失われていきました。さらに観光客の旅行形態が多様化するなか、バブル経済の崩壊も加わり温泉地の衰退がみられるようになります。

温泉地が低迷する一方で、高度成長期のゴルフ場開発、バブル経済期のリゾート開発など、大規模な開発から地域をあげて由布岳を背景とした自然と田園風景を守り、滞在型保養温泉地をめざしてまちづくりに取り組んだ大分県由布院温泉や、湯治場の雰囲気を感じる「秘湯」として乳白色の豊かな温泉資源とひなびた景観を守る秋田県乳頭温泉郷など、各地域の特色を生かし個性を守った温泉地は多くの観光客で賑わいました。温泉地の多様性を理解しコンセプトを明確にしたうえで、その価値を地域で共有しながら磨き続けることの大切さがここに表れています。

温泉地の取り組み
～人々の集まる場を目指して～

温泉地が厳しい状況におかれる中、地域住民、観光産業、行政などが協力して地域活性化への取り組みが進められています。ハード面では愛媛県道後温泉本館、群馬県草津温泉の湯畑など歴史的なシンボルを中心に温泉街の景観整備等を進める事例や廃業した旅館を取り壊し新たな総湯（共

温泉街のシンボル「道後温泉本館」を浴衣で歩く観光客　（愛媛県道後温泉）

湯畑再整備事業に伴い駐車場を憩いの「湯路広場」に
（群馬県草津温泉）

同湯）を整備した石川県山代温泉等の事例もあります。共同湯は外来者のものではなく、地域の人々にとって重要な暮らしの場であり交流の場でもあります。観光対象化しすぎることは「共同湯」としての歴史性を失わせる場合もあり慎重な取り扱いも求められますが、一方では各地域の歴史的な文脈をいかして地域固有の魅力とシンボルを創出する試みといえます。

ソフト面では黒川温泉が取り組んだ「入湯手形による露天風呂めぐり」など共同湯や旅館の湯めぐりの楽しさを地域が協力して提供することで、浴衣姿で温泉街を歩く楽しみを生み出し観光客の回遊性を高めています。さらに別府温泉の「オンパク」は地域住民に対して地域の素材をまち歩きツアーや体験プログラムなどにして集合的に展開するイベントとして成功し、現在は温泉地以外の地域でもこの手法を生かした地域活性化が進められています。また温泉が持つ健康増進の側面から地域づくりに取り組む事例も見られます。山形県かみのやま温泉では自然環境、温泉街等の拠点を生かし、「気候性地形療法」に基づくウォーキングを行う「上山型温泉クアオルト」という保養滞在プログラムを提供しています。これは観光客だけではなく地域住民の参加者も多く、地域の人々の健康増進と交流にも貢献しながら温泉地滞在の魅力を高めています。

温泉地の中心に明治期の総湯を「古総湯」（中央）として復元するとともに、市民の為の共同浴場として「総湯」（左下）を新設
（石川県山代温泉）

旅館主人の案内で宿泊客と市民が一緒に「早朝ウォーキング」
（山形県かみのやま温泉）

おわりに

温泉地は多様な泉質をもつ温泉資源、温泉地を取り巻く自然環境と歴史、温泉の療養・保養機能を生かした滞在プログラムなどの多くの魅力があります。そして温泉地は地域が温泉の特徴を理解しその価値を守ることでこそ、地域と観光客、地域住民同士を結ぶ場になってきました。温泉が人々を引き付ける「集いの場」であったことは、過去から未来への重要なヒントになり得るのではないでしょうか。